

光風社版

南国群狼伝

柴田錬三郎選集II

柴田鍊三郎選集 第二卷
南国群狼伝

昭和四十年二月二十五日 印刷
昭和四十年三月五日 発行

△第八回配本△

定価 三八〇円

著 者 柴田鍊三郎
発行者 豊島清史
印刷者 染谷秋雄

発行所

株式会社 光風社

東京都千代田区柳田船町三ノ二四
電話東京部〇二三八番
振替東京五六五二六番

落丁・乱丁は御取替いたします。

柴田鍊三郎選集 第二卷

南国群狼伝

私説 大岡政談

目次

南国群狼伝

花ざかりの森

南蛮屋敷

美女浚い

江戸の浪人たち

地獄牢

姫舞い

美少年

闇の目

四君子

白円陣

踏絵

五

七

四

三

元

壹

三

兎

美

三

吉

名

殉教

四

さかさ銀杏

六

紫雲旗

六

きりしたん四郎

一〇五

呂宋行

二三

幻の城

二九

原城暮色

二六

落日

二三

私説 大岡政談

一四二

発端篇

一四三

第一話 鶴の巢騒動

一五

第二話 かくれ鐘

一五

第三話 変化御殿

二〇五

装
幀

三
井
永
一

南国群狼伝

花ざかりの森

一

「——ほ！」

およそ、一刻も、鼻を衝くような険しい急坂を、倦ま
ずに、せつせと登って来た赤猿佐助は、突然、岩も樹木
もかき消えた明るさに、顔をあげて、パチパチと眩しげ
に、まばたきした。

山また山の、巖あいを縫う柚径をひろって来て、いつ
か下界から遠い山霊の棲む嶺ふところに入って、佐助は、
全くの無心にかえっていたのである。

突然、涯もなくひろがった草地の一隅に立たされて、
佐助は、ぬるい微風になぶられるおのが老いの身を、と
まどわせた。

春——まさに 闌の、生きもののいのちの息づかいと
うごめきが、草地いちめんに満ちていたのである。

若い女の柔肌のような、けがれを知らぬ、いきいきと
した生気が、一時に、佐助をおしつつんで来た、といえ

る、

啼々として、青草を跳ぶ小さな動物や、中空にはばた
く小禽が、ここへ春をはこんで来て、夢の世界をつくつ
たかと、錯覚される。

げんに、佐助の眼前一間ばかりのところに、にひきの
兎がならんで、この無断の侵入者の行手をはばむように、
長い耳を立てて、赤い目をじっと据えている。

「はははは……」

佐助は、笑ってみせた。

「咎めるでないぞ。むさい面をして居るが、獵人の険し
い目つきはして居るまいがな」

そうことわって、のそのそと歩き出すと、兎たちは、
くるっと尻を向けるや、すばしく、走り去った。

……およそ、一里を進むあいだ、佐助は、牙を持たぬ
優しい動物たちを、幾十匹となく見かけた。

やがて、濶葉樹の森をくぐると、これはまた、小さな
湖をかこんで、いちめん春の花ざかりの一郭であった。

すみれ、あずま菊、あざみ、れんげ草、桜草……。

こいわ桜の群落が、ひとときわ、鮮かに浮き立つ彩りで
あった。

そして、色さまさまの蝶が、その上を、舞うていた。

佐助は、なんとなく、かぶりをふって、湖の畔に出た。水草が、ぽっかりと大きな白い花を咲かせ、そのかわらの水面の浮巢に、小鵜のとまっている景色は、まさしく、一幅の絵であった。

佐助は、どっこいしょと、柔かい青苔の上へ胡坐をかいて、しばらく、澄んだ水面へ、放心の眼眸を落していたが、やがて、ふと、ゆるやかに動く水花へ、眉宇をひそめた。

「ふむ！」

にやっとして、合点してから、佐助は、口をひらいた。「お久しゅうござる」

水花が除けられ、ゆるやかな波紋を描いて、ひとつの貌が、水上へ浮いた。

冷たく冴えた眉目は、若い忍者のものであった。

ゆっくりと、抜き手をきって、岸边へおよぎつくと、その遅しい裸形をあらわした。

寛永御前試合にあたって、その勝者悉くに闘いを挑んで、一度も敗れなかったこの若い忍者は、三年の歳月を経て、さらに、その軀を鍛えあげていた。

無駄な肉是一片もなく、瘦せぎすにひき緊った筋骨は、弾力のある鋼鉄に、よく鞣した革を張ったように、滑か

で、美しく、のびのびと発達していた。

もはや、「若影」と呼ぶには、あまりにも器は完成し、その父服部半蔵と「母影」の血を合せて雕し琢した「影」そのものであった。

もとより、雕し琢されはしたが、いまだ、樸に反る人格を所有するには、ほど遠いであろうが……。

総髪を櫛でたばね、黒の小袖をまとって、大刀を一本だけ腰に帯びた「影」は、そのまま、岸边をふりかえりもせず、歩き出していた。

佐助は、三年前と変らぬ不愛想さを氣にもとめずに、うしろにしたがった。

二

その庵は、森の中に、ひっそりと建っていた。

小猿を頸にすがりつかせた巨きな牝猿が、跽音をききつけて、樹上から飛び降りると、主人のために、板戸を開けた。

炬辺に坐った「影」の口から、吐かれたのは、

「天下は泰平か？」

その言葉であった。

「まずまず……」

佐助は、にこにこと、頷いてみせた。

「おかげで、このわしだけは、忙しい思いをつかまつり申した」

主人真田左衛門佐幸村が、黒部の秘境で、睡るように逝ったのは、去年の春であつた。

その遺言によつて、この一年間、佐助は、豊家の遺臣たちを歴訪して、それぞれの生活が成立つようにする仕事をつづけて来たのであつた。

この若い忍者の好意によつて、京の都の西郊の丘陵から掘り出された平家財宝が、そっくり、その扶持にあてられたのである。

佐助は、その仕事で、ようやく終わったことを報告に、やつて来たのである。

佐助は、一人語りにも似た時刻を移してから、ふと、思い出したように、

「ところで、お前様は、近頃、しばしば、江戸へお出かけなさることがおありかな？」

と、何気ない調子で、問うた。

「ある。月に二三度は」

この奥秩父から江戸まで、三十里の距離も、「影」の足をもつてすれば、往復するのに一昼夜を要するのみで

あつた。

「ふうん——」

佐助は、皺面を、つるりとひと撫でしてから、独語するように、

「悪戯が、チトすぎるのではござるまいかな」

と、言つた。

「……」

「影」は、じつと、佐助を噴めかえしていたが、ふっと、薄ら笑つた。

「どうして、おぬしの耳に入つた？」

「夢男の噂は、半年ばかり前から、きいて居つたが、よもや、お前様の仕業とは、気づかなんだ。ところが、先月はじめ、織田兵部少輔殿の奥方が、夢男に犯されて、自刃されたとき及んで、ハタと納得つかまつた」

それをきいて「影」は、双眼を光らせた。

「自刃した？」

「左様——。どうやら、兵部少輔殿が、無理矢理に、自刃させてしもうたときいた」

「……」

「影」は、もとの冴えた無表情に戻ると、

「……美人であつたな」

ぼつりと、言いすてた。

「影」が豊臣家に恩顧を蒙り乍ら、大阪の役にあたつて、旗幟を反して、徳川家につき、その家を安泰にした大名をえらんで、つぎつぎと屋敷へ忍び入つて、夫人もしくはその女を犯しはじめたのは、昨年の夏からであつた。

警戒きびしい諸藩邸も「影」の目には、空家同然に映つた、といつても過言にはならない。

当時は、まだ、桃山時代の遺風をのこして、各大名屋敷はそれぞれ、豪壯を競うていた。二重の櫓門、大棟門を表門とし、別に將軍家の御成りに備えて、御成門を設け、屋敷の周囲には長屋をつらねて家中の住居とし、公式部分は書院造風となり、上段をそなえ、廊下を廻し（主殿の広縁に當る）、庭前には能舞台を有した。常住の部分は、壺庭を距ててあり、その中間に台所が位置し、長局の棟は、その奥に廊下でつながつていた。

夫人および女中たちの住居である長局は、一本の廊下が各部屋に通ずる構えで、いわば、今日の団地のように單純であつた。

すなわち――。

公儀は、大名がたに、その屋敷を築かせるのに、いか

に豪壯をきわめようと、出費は咎めず、むしろ奨励さえしたが、その構造は、嚴重に取締つたのである。決して、独特の設計は許さず、規定の絵図面にしたがわせた。したがつて、親藩・譜代・外様の別に応じ、格式・石高の差に準じて、その邸第の模様は、手にとるように明白であつた。

「影」が、その敏捷無比の身を忍び込ませて、その目的を遂げ、悠々と退散することは、易々たる業であつた。

「影」が、他の暴漢とおのれを区別したのは、對手を夢裡に犯しておいて、目ざめるまで、知らずにすごさることであつた。

あるいは、書物を読み耽つているところへ、音もなく迫つて、これを睡らせて、ひえびえとした畳の上で、帯を解いて、肌身を剝いた。女は、目ざめて、掀げた裳裾の中に、おのが下肢が、ざまざましく、八の字に押し開かれてゐるのに氣づくことになつた。

あるいは、また――。

良人と同衾してゐる夜をえらんで、忍び入り、その営みに疲れはてて睡り入つたのを、見すまして、良人の方を畳へひき出して、代つて、愛撫の一刻を過すとか。

また、ある時は、壺庭へかかえ出し、飛石を枕にさせ、月の光の中で、犯すとか……。

思うがまま、「影」の趣向は、凝らされたのである。そして、推参すいさんの証拠として、必ず、その下腹へ、むかしの装飾風の葦手あしで絵を真似た文字絵を、描きのこしたのである。

それは、「ゆめおとこ」と読めた。ただの墨ではなく、特殊の塗料を用いたために、一度や二度の入浴ぐらいでは、洗い落せなかった。

被害を蒙った各藩邸は、この恥辱を厳秘にふしたが、隠すより現るるはないたとえにもれず、いつか、「夢男」の噂は、殿中はもとより、巷間にも、ささやかれるようになっていた。

慙はじて、自ら生命を断つ者も出たし、良人から斬られて果てた者もいたし、つぎつぎと悲劇が演じられて、邸内に暗い翳かげが落ちない家はなかったのである。

賢明に、良人にも召使いにも知らさずにすませた夫人もいたが、これは、ふたたび、「影」の襲撃を受けるところとなった。

その場合「影」は、おのれの姿を、面前に現し、恐怖させ戦慄させつつ、睡らせて、これを抱いた。

三

「影」が、織田兵部少輔信良の夫人を犯したのは、先月はじめであった。

かぞえて、十七番目の犠牲者であった。これは、むしろ、おそきに失したといえる。

美貌の噂たかく、聡明をもつてきこえた夫人だったのである。

織田信良は、信長の次男のふかつ信雄の三男であった。従四位上左少将に叙せられ、上野国小幡に二万石を領していた。その父信雄が、名家北畠を嗣ぎ、はじめ、家臣の豊臣秀吉に屈せず、徳川家康と勢を合せて、小牧・長久手の役を起したことは、掲載かもちるまでもないことである。

天正十三年、秀吉が関白となり、従三位権大納言の信雄は、朝廷の位階でもすでに昔の関係をゆるさなくなり、やむなく、秀吉に屈した。

野州那須で謫居たきまののちに、入道となっていたが、文禄の朝鮮役の頃、召出されて、関白秀吉の御相伴衆に加えられ、また秀吉の前に伺候した。

関ヶ原役では、石田三成のために欺かれて、西軍に応援んとして事ならず、ついに、尺寸の地もない人となつ

た。やむなく、叔姪の間柄である淀君をたよって、寓した。

ところが、大阪の乱が起るや、信雄は、翻心して、大阪城から、風雨に乗じて、脱れ出て、家康の許へ趨った。そして、豊臣家がほろんだのち、和州宇多郡五万石を与えられて、寛永七年に、七十三歳で逝った。

その父信長の赫々たる威武の後を承けたために、信雄が、歴史にとどめた失計の事跡は、あまりに惨めなものとなり、織田家がなおも、残存していることを、にがにがしく思う人も尠くなかったのである。

豊臣家を裏切って、徳川幕府の下に、家をのこしている大名をにくむ「影」として、この織田家を見のがす筈がなかった。

「影」は、その夫人を犯すに、はじめて、睡らせることをしなかった。

自分が、信良に、風丰体格が似かよっているのを利して、巧みに信良に扮して、信良が長局に入る半刻前に、夫人の寝所をおとずれたのであった。

すでに、寝所における信良の振舞いは、天井裏からつぶさに見とどけている「影」に、夫人に疑念を抱かせる遺漏はなかった。

灯を細めて、あとから褥に入って来た夫人を、ゆるゆると全裸にして、その白い豊かな肌を、くまなく、舌で舐味するのを、信良は、常の前戯としていた。

「影」は、それにならって、信良よりも、さらに、念を罩めた。

……やがて、胸の隆起を、五指それぞれに与えて、股間へ、男の顔を埋めさせた夫人は、恍惚に堪え得ぬ低声をもらして、生絹の脚布を鳴らして、腰をもだえさせた。

信良本人が、入って来たのは、その時であった。

声もたたず棒立った信良は、やおら起き上ったおのれをそっくりに写しとった男の貌を視て、けだものじみた叫びを発したことだった。

信良が「影」に躍りかかった時、夫人は、すでに失神していた。

信良もまた、両のこぶしをむなしく、宙に舞わせたまま、意識をすてさせられた。

われにかえった折には、質物がそうしていたと同じ恰好で、妻の股間へ、顔を埋めていたのであった。

「ゆめおとこ」の絵文字が、その統のような美しい下腹の円部へ、くろぐろと記しのこされていたことは、例外ではなかった。

いま、あの美貌の貞女が、自刃したときかされ乍ら、「影」の冷たい滑石色の面相に、一片の悔悟の色も現れていなかった。

遠い目が、思い泛べているのは、美しかった肢体であろうか。

「のう、影殿」

佐助は、咳払いをひとつしてから、言いかけた。

「お前様も、そろそろ、世嗣ぎを儲けてはいかがでござるかな」

「影」は、佐助を見かえして、

「おれに、嫁を与えて、本能を矯めさせようとの存念なら、措いてくれ」

と、しりぞけた。

「い、いや、そういうわけではないが……、御世おさまれば、忍者も、正当のくらしをして、一向にさしつかえあるまい、と思うてな」

「生きのびたぞ、赤猿！」

鋭く、「影」は、あびせた。

「左様、生きのびすぎた。お主の遺言がなければ、むざとは、息をむさばらなんだ」

佐助は、ふかいためいきをついた。

「おれは、おれの生きたいように生きる！ 去んでくれ」に、べもなく言いすてて、「影」は、すっと立って、庵を出て行き、それきり戻らなかった。

昏れて、下界への坂道を辿りはじめた佐助は、ひとり、いくども、かなしげにかぶりをふっていた。

南蛮屋敷

一

博勞町——という。

文字通り、一日に馬市の立つ一郭で、諸国から曳かれて来た馬匹と、半裸の博勞と、そして馬蠅があふれていた。

ほかの街衢が、公儀法度の厳肅がゆきわたって、秩序にしたがって、整然として来るにつれて、はんたいにいよいよす穢く、野蠻になり、その臭氣にひき寄せられるように、浮世の掟からはみ出した連中が、集って来て、いまでは、名馬さがしの武家のほかは、まっとうな人々は、おそれて、近づかないのであった。

編笠で顔をかくし、鼠の木綿を着流した牢人姿が、肩に、いっぴきの小猿をとまらせて、飄然と、博勞宿のひとつへ、入って来るのを見かけても、これを胡散くさく思う者は一人もいなかった。

泊り賃を先に投げておいて、無言で、ずっと二階へ上

って行く——。

肩の小猿が、たかつて来る蠅を、ひよいひよい、とつかまえて、口に入れるすばやさを、小女が、みとめて、「へえ——」と目を睜ったばかりであった。

焼け跡だらけの、傾いた畳に立って、はじめて、編笠をとると、小猿も、肩から跳んで、西陽のあたる窓へ、ちよこなんと、うずくまった。

……ごろりと仰臥して、目蓋をふさぐ。それきり、微動もせず、西陽が貌にあたるにまかせた。

江戸における「影」の定宿が、ここであった。

そうして、どれくらいの時刻が移ったか——。

突然、おもての辻から、なにか紛争が起ったらしい騒音がったわって来た。

そして、それは、この旅籠の前へ、移動して来た。

「そ、その猿めを、とらえいっ」

呶号する武士らしい声に、「影」は、目蓋を開いた。やおら起き上った「影」は、窓から、ぱっと逃げ戻って来た小猿を視て、眉宇をひそめた。

その手に、何やら、煙とかがやくものを掴んでいた。

「影」が、黙って、右手をさし出すと、小猿は、胡桃まなこで、主人を見上げ乍ら、すなおに、さし出した。